

## 薫風

藍海を揺蕩たゆたう海月たちは、その内部に色彩を孕んでいる。反復する表皮の伸縮が、来たる今宵の月光を乱反射している。

逆側からは、もう直ぐ命尽きる今日の陽光である。遙か遠く、水平線あたりから柔らかな陽の色が、暮れ染まる天球に滲んでいる。「青」と「橙」が混ざり合っている。

生温い風が、僕の頬を掠めた。

危うく錆びれたガードレールに身体を擲つところだった。

「一緒じゃんか」

僕はぐっしより湿ったタンクトップで首筋を拭う。

一滴、また一滴。ペダルの軋む音に乗せ、その粒々は軽やかに流されてゆく。それが地面に衝突するまでのごく短い時間、しかしそれは悠久にも何万分の一秒を消費しながら斜

陽を取り込むのだ。或る時は鈍色、或る時は玉虫色、或る時は――。

瞬きを忘れるほどにその一連の変色を見ていたらしい。ハンドルの向きを直し、窠やっれたサドルに腰を据える。足に力を込めればまた同じくして、顔面の稜線をなぞるように汗の粒々が流されてゆく。僕は無性に頂上を求めてペダルを漕いだ。もう一度、そう願った声は潮風に消えた。

遡ること一年前の夏。僕の住むこの町はいつも通り賑わっていた。

岸には沖から帰ってきた船が何隻も繫留けいりゆうさされている。市場では貫禄おじさんたちがなんだか忙しそうに指を折って数字らしきものを飛び交わしている。独特の磯の香りがすんと鼻腔を通って身体を巡った。相棒自転車とのサイクリング、何の因果かいつもの中路じゃなく沿岸路を選んでみた。ビビットカラーの車体に海面からの朝日が反射している。その

清々しい空気を身一杯に受け取って漁港を過ぎた。

港から小距離、路はやや勾配を強め始める。この町は少し不思議だ。中央の乃口山へ向かって、町中から路が合流している。そしてそこからまっすぐ、一本坂が先端の崖に通じている。また、町の輪郭に沿って沿岸路が走っている。蜘蛛の巣と植物の葉脈のハイブリッド、というのが最も近いだろう。ちようど中腹あたりまできた頃だろうか、

突然に追い風が吹き出した。奇妙にもそれは坂を上る背中を押し続ける。陽も先ほどに比べれば高くなってきた。汗ばむ額をからりとした空気が纏う。活力がみなぎる。風を切つて進む僕の目には、目的地の輪郭がぼんやりと映ってきた。頂上の丘陵に僕は胸が躍った。ついにラスト一漕ぎ、力強く踏み込むと、それまでの勾配は一気に緩やかになった。僕の前には草原が広がった。草花が風に揺れている。

「写真みたい」

フレームを構成するうち、上三分の一は空の蒼。真ん中は海の藍。そして下三分の一は野の碧。僕はその色彩を思いつきし吸って飲み込んだ。身体の奥深く、透き通った風が染み渡る。もう一つ、今度は吐いた。

「やつほおー」

山なんて他に無いか、と我に帰る暇なく返答が来た。

「やつほおー」

僕は驚いて辺りを見回した、が、無論人影は見当たらない。

そこでもう一声、

「ばかあー」

「ばかあー」

これは愉快だ。声がかたまする。どんな原理だ、と考えかけた時、また一つ声が出た。

「あほおー」

これもこだましました。ん、誰の声だ。後ろを振り返ると、光が反射する。眩くシルエットが

浮かぶ。徐々に目が慣れ、はつきりし出した。少女が立っている。いや、少女と言うには大人らしすぎる、背丈は僕の胸ぐらいで、純白のワンピースに艶やかな黒髪が靡なびいている。だけどこの町には見慣れない。反射的に僕は尋ねていた。

「あほおつてどういうことですかあ」  
ああそうだ、こだまするんだった。

「ばかあつてどういうことですかあ」  
こだまは形を変えて返ってきた。

「私がばかだつて言いたいんですかあ」  
僕は慌てて返答した。

「違いますう」  
「じゃあなんでばかあつて叫んでたんですかあ」

「別にい」  
なんだこのやりとり、とてつもなく滑稽だ。僕が吹き出すのと同時に彼女もまた笑った。彼女は草原の向こうから近づいてくる。

「私、留る叶か。あなたこの町の人？」

「そうだけど」

「今日の夕方、またここに来て。約束」

彼女はそう言っただけで坂を下っていった。僕の間の一部を奪ったことなど気に留める素振りもなく。風は止んでいた。

陽はいつの間にか高く上がって、路がかげろうしている。ペダルを漕ぐ足も少し気だるい。ただ、朝と勾配が逆なのは救いだっただけ。暫くして家に帰った。

「ただいま」

返答はない。翳<sup>かげ</sup>った居間には昭和式の家具たちが佇んでいる。畳の上にポツンと置かれた小ちやぶ台へ鍵を投げ置いて、洗面台に向かった。

「誰だったんだ結局」

掬った水に素朴な疑問が映る。垢のこびり付いた鏡と対峙しても、火照った自分があるだけだ。僕は目を閉じ汗を洗った。

「ああ腹減った」

朝は何も食べていなかったのだから、食欲は有り

余っている。確か棚にカップ麺が余ってたはず、そう期待して向かうと、思った通り。得てしてお湯を沸かし、注ぐ。僕はそれを片手に居間へ戻った。

薄暗かった部屋に匂いが充満する。何気なくテレビをつけると、ちょうど天気予報コーナー。最近はずこぶる熱暑、今日も同じく灼熱の予感だ。画面のお天気お姉さん曰く最高気温は三十五度近く、午後からにわか雨の可能性あり、と。

「え、夕方雨なん」

雨が降ると分かっていたながら外に出るのは少し億劫。けれども、約束を無下にするのも申し訳ない。気はあまり乗らないが、昼過ぎには支度を始めよう。そう思っていたらタイマーが鳴った。

一方テレビは次のニュースに移る。

「——が多発しています。警戒を怠ることのないように——」

陽は南中をとうに過ぎていた。さても空の

機嫌というのは変わりやすいものだ。今朝は雲一つなかったのに、怪しげな西の空、分厚い曇天が堂々と成長している。なまじ予報は当たるかもしれない。僕は箆笥の奥から雨合羽を引つ張り出した。そろそろ出発だ。

玄関の扉を開けた途端、風が吹く。仄かな雨の香りがする。埃くさい合羽に袖を通すとどこからかぽつり、雨粒を弾いた。地面を蹴って自転車を加速させる。今回はいつもの中路だ。家屋の隙間を縫う入り組んだ小路だけれど、頂丘への最短ルート。車輪の転がる音が軽快、朝とはまた打って変わった清々しさだ。と不意にひよんな疑問が湧いた。

「留叶は、どうやって？」

彼女はあの坂を歩いて帰った。が、まさか歩いて？まあいいか、どうせ会えるんだから。聞きたいことは山程ある。

今朝比一割増の傾斜が続いている。一番早く着くとはいえ、それなりに時間はかかるし、全汗腺が稼働しつつある。おまけに少しじめ



つたい。前の乱雲がジリジリと接近中みたいだ。僕は心なしか、漕ぎを早める。

坂の中盤、路は舗装道に合流した。眼下左手には、大洋が広がっている。点在する帆船と巨大な貨物船の構図が見事、やはり画になる。上から眺める港は新しい表情をしている。海上を漂う白い靄々、あれはなんだろう、最近問題のプラスチックとかだつたりして。僕は散らばる種々の色彩に目を奪われた。景色は、進む車体と相対的に流れ高度をゆつくり増してゆく。

その逆行をかき消すように、後方から軽トラックがやって来た。それは僕を追い越すやいなや減速し、テールランプが戻ってきた。

「あんちゃん、どこさ行くんやあ、こつから雨降るにい」

「ちよつと山頂のどこまで」  
しやがれた声の運転手は、ウインドウから訝しげな顔を覗かせて言う。

「なあにがあんだあ、あんなところお」

「ちよつと野暮用で」

「そうかあ、まあ気いつけやあ、お天道さんみくびつちやかんにい」

「ありがとうございます、気をつけます」

老爺は分かったような分かってないような頷きを数回し、クラクションを一発残していった。

僕はほんの早く到着してしまった。良い具合に気温が下がろうかというところだ。案の定彼女はまだ居ない。周りを見渡すと、今朝のとは違うキャンバスが切れ目なく続いている。ここは周囲全方位が繋がっているのである。僕は一つその色彩を吸った。

「来てくれたんだ」

振り返ると向かい風が僕の汗を攫った。だがそこには誰もいない。ただ草原が揺れている。

「雨降りそうだし来てくれないかと思ったよ  
また背後、声は聞こえる。」

「どこにいるんだ」

呼んでも彼女は出てこない。ただ楽しそうな笑い声がそこらじゅうから飛んでくる。

「もうすぐね、陽が暮れるよ、あとちよつと  
「留叶、君は何なんだ」

「いいから待ってなさいって」

そう彼女は言うと言は聞こえなくなつた。草花もそれに応えるように静まつている。僕は一人ぶつぶつと喋っていたようだが、彼女は返答する気配が更々ない。やつと姿なき声が聞こえたのは日没の数分前。

「見て、海の方」

それは唐突に沈黙を破つた。指示の通り視線を遣ると――、

「ほら、あれ、あそこ」

彼女は無邪気に指差している。純白のワンピースが風に揺れている。

「白いもやもやがいろんな色に見えるでしょ  
「え、ええ、今、どこから」

「どこでも。それよりほら、あつちはオレン

ジ」

急の出現に動揺しつつ、なんとか僕は海に視界を移した。

「すげえ」

膨大な曠野の中に、星々が点灯している。僕は呆気に取られた。こうも驚きという感情が波のように押し寄せてくるものか。或るところは琥珀色、或るところは翡翠色、或るところは――。そんな風に白い靄々が色彩を帯びてゆらゆら漂っているのだ。

「きれい」

僕の口からボソツと出た声と彼女の口からほろつと溢れた声とが、ちょうど重なった。僕らはお互いの顔を見合う。そうして壮大な神秘に見惚れ直すのである。

「なぜ君は僕をここに呼んだの？」

僕はじつと彼女の方を見た。

「見せられるうちに見せたかったから」

「見せられるうちで。君は一体何なんだ」

彼女は数秒の無言をして、海の方を見つめた。

「私は」

彼女が次の言葉を発そうとしたその時、肩に雫が落ちてきた。

「あつ」

ずっと下の藍色ばつかしを見ていたからか、上の濃灰色に気づかなかつた。いつしか聳え立つ積乱雲は囂々と変貌し、瞬きのうちに猛る。轟音が一つ、町中に響き渡つたかと思うと、眼前、靄の個体を目掛けて閃爍が駆け空から海へ直線、天地が繋がる。靄は半透明の中にプラズマを吸収して眩光を放つ。異常

なエネルギーを供給された細胞は分裂と膨張を開始し、皮膚の継ぎ目から数多の色彩スペクトルを放出する。体感はものすごく長く、しかしそのスローモーションはコンマ秒未満の出来事だった。靄は発光と共に、破裂した。僕はあまりの一瞬に言葉が詰まる。

「大、丈夫？」

そう問いかけた先の彼女は、泣いていた。

「今日はありがとう、来てくれて。またね」

「待って、君どうやって——」

降り頻る黒雨の中、僕の伸ばした手は、虚空を掴んだ。吹き荒む草原、そこに彼女はいなかった。

帰路は心ここにあらず、放心状態を窮めていた。頭の中を遣る瀬ない思いがぐるぐる駆けずつている。彼女はなぜ、彼女はどこに、彼女は――。

僕は路上の水溜りを疾走する。雨の線が後ろに流れて行き、腥風せいふうが背中を押す。雨合羽の中がひどく蒸さつて不快だ。等間隔に置かれた街灯が不気味に点滅する。色彩は既に失われ、僕の赫いテールライトだけが暗がり揺れていた。

帰宅した頃は、だいぶ雨が治っていた。僕は自転車を停め、そそくさと雨合羽を脱ぐ。結局髪も服も水分をどつぷりと蓄えている。

「ただいま」  
返答はない。翳った居間が一層重苦しい。畳の上にポツンと置かれた小ちゃぶ台へ鍵を投げ置いて、洗面台に向かった。

「大丈夫なわけ、ないよな」

掬った水に彼女の幻影が映る。垢のこびり付いた鏡と対峙しても、濡れた自分がいるだけだ。僕は目を閉じ水をかけた。

実体のない引力が僕を畳に引き寄せる。僕は仰向けになって天井を見つめ、無意識に手を伸ばしていた。掴もうとしたあの手。握ろうとしたあの掌。瞼の裏にずっとピートする。白熱灯の暖光がじんわりと僕を眠りに着かせた。

泡が上昇していく。鼓膜は機能しないようだ、体内を巡る血液の循環の音だけが聞こえる。様々な周波は皮膚が感じている。僕は海中にいた。だが不思議なことに呼吸できる。屈折した斜陽の光が燦々として、地上からは同化して見えなかった岩礁、そこを棲み家にして暮らす魚たち、青海からの景色は当然青い。

「あれは、雲？」

頭上三メートルくらいにそれは浮遊している。全身が透過していた。

「クラゲだ」

僕の発見が通じたのか、それは動きを止めた。まるで何かを待っているかのように。

気づけば斜陽の入射が弱まってきた、膜の上には更に灰が重なっている。

ぽちゃん、同心円が広がった。波面のうねりに合わせ、それは身を委ねる。ぽちゃん、ぽちゃん。無音に振動が伝播して、そして収

束していく。凧いでいた水面に何度かのうねりが生じた後、それは忽然と動きを開始した。周囲に微細な海流が発生する。それは螺旋を生成し、ふかふかと舞う。長く伸びた触腕は光沢を放ち、手先からは電子に似た胞子が散乱している。

「きれい」

「——？」

心の奥底深く、澱みの中の痼りが純粹な感覚に抓られる。気持ちが悪い。



僕は理解をした、これは記憶だ。僕らがあるの頂上で見た白い靄々、それは海月。同心円、これは雨。ということ、上の灰が雲。精緻に状況が再現されている。暮れゆく海に色彩が散る。いつの間にか海月の動作の連続が、照準器のような幾何学模様を出現させていたことに、僕は状況の整理で気づかなかつた。

身体中に鳥肌が走る、ああ同じだ。目の前の海月一匹に目掛けて、閃爍が降る。それは半透明の中にプラズマを吸収して眩光を放つ。

異常なエネルギーを供給された細胞は分裂と膨張を開始し、皮膚の継ぎ目から数多の色彩スペクトルを放出する。

「まずい」  
頭が働くよりまず体が動いた。僕は海月に手を伸ばしていた。

「止まれ、止まれええ」  
破裂する、その事実が僕を駆り立てていた。

蝉が鳴いている。瞼を開いたそこには見慣

れた天井、また手を伸ばしていた。息が上がっている。背中が汗でぐっしよりだ。僕は扇風機のスイッチに上半身を持ち上げると、脇下の筋繊維に軽い痺れが起こったのを感じた。「痛て、攣った」

鋭い痛みを摩って誤魔化しながら、僕は水を取りに起床した。コップに汲んだ水道水が五臓と六腑に浸潤した。

「夢、か」

漠然とした思いが思考を占有している。あれはクラゲだった、夢が確かならば。じゃあなぜ彼女は泣いた。情報の収支があまりにも不釣り合いだ。一旦整序したい、僕はそう思つて図書館に行くことにした。開館の時間まではまだ少々あるので、雑仕事をそれなりにして暇を潰した。

図書館は町の中で古い方の建物になる。僕はそこの香りが好きだった。書籍たちが頭の高さまでずらつと配架されていて、偶にそのうちの全くの無名本に惹かれる。無心で頁を

捲るたびに紙が擦れ、柔らかな音がする。感触を指先から直に感じる。そんな一連の体験が好きなのである。

さて今日の図書館は格別静寂だ。人が疎らも疎ら。対照的に、受付カウンターには配架待ちの入荷作品が山積し、名物司書さんがそつなく仕事をこなしている。

「すみません、生き物の本ってどこですか」何やらラベル張りに勤しむ手を止め、そばかす眼鏡がこちらを見上げた。

「生物は突きあたり奥から三、四列目のところ  
「鳥類と哺乳類は五列目にも」  
ぼそつとした早口にはいつも動揺する。

「ど、どうも」  
僕は小さく会釈をしてカウンターを後にした。軽く一瞥をやると彼女は早速仕事に戻っていたが。

生物の棚は思いのほか追いやられている。辿り着くまでに当然ながら沢山の本を見かけた。児童文学から事典辞書、芸術なんかの小

難しい本まで。

「奥から三と四列目」

僕はまず手前の棚を通覧して「軟体動物・貝類学」の分類を見つけた。ずらつと分厚い本が並んでいる。手頃な一冊を手にとつて、ざつと走り読みする。いまいちであつた。隣のものはどうだろうか。

「うーん」

どれもほどほどにかすつてくる。裏の棚は、左上から「いろいろな植物」「動物学」「動

物地理・動物誌」と。せり出した分類を指で順に追つていくと、或る本に邂逅した。

「くらげ図鑑」

それは「無脊椎動物」の分類に構えていた。図鑑という割に背格好は小さめだ。背表紙にタイトルと小さなクラゲの絵が描かれている。僕はその本を引き抜いた。

「これ——」

表紙のクラゲは、あたかも僕が夢に見たものと瓜二つ、色彩を帯びたあの海月であつた。

夢中で僕はページを送る。だが、いつこうに表紙の種は出てこない。全部で約三千とあったが納得だ。

「ハリトレフエス・マーシ」

「ツリトプシス・ヌツリクラ」

「キロネツクス・フレツケリ」

仰々しい名前が連なる中、一変して単純な名をした種が登場した。

「オキクラゲ」

しかしそれが僕を引き留めたのは、まさしく探していた種であつたからだ。

「オキクラゲ (*Pelagia noctiluca*)

.. 刺胞動物門・鉢虫綱・旗口クラゲ目・オキクラゲ科・オキクラゲ属

.. 外洋性で、台風や強風、波や潮に流されて海岸付近に観察される事もある。多様な体色を持ち、刺激を受けると青白く発光する」

驚いた、ほとんど合致している。僕は一日脇に抱え、続けて他の本を見る。司書さんが教えてくれた三列目には、生物に加えて「気

象学」やら「海洋学」やらの分類を見つけ、面白そうな数冊を手にとった。

閲覧席に落ち着いて、僕は本を広げる。先程のクラゲをもう一度観察してみると、やはりそっくりだ。

「オキクラゲ」

僕は不思議に安堵していた。それは未知が判明したからでなく、現実を認識したからである。記憶の中に沈もうとしていた断片が僅かずつ紡がれている。ひとまず凶鑑は開いたままにして、僕は持ってきた他の本を見てみることにした。

しかし、大した収穫はそれ以来現れなかった。おもむろに僕は席を立ち、残りの棚を横目にカウンターへ行く。

相変わらずそばかす眼鏡は忙しそうだ。

「すみません、これ借りたいんですけど」

僕は本二冊と利用カードを手渡した。事務的に裏面のバーコードがスキャンされる。

「期限は再来週、延長は期日迄に」

「ありがとうございます」

僕は小さく会釈をしてカウンターを後にした。軽く一瞥をやると彼女は早速仕事に戻っていたが。

「女将さあん、生ふたつう」

「あいよ、お待ちい」

市場の居酒屋は昼から呑ん兵衛たちの溜まり場であつた。

「そいえばなあ、昨日雨降りよつたやろお」

「おん」

「俺ちようど昼過ぎ、乃口の路走つとつてなあ。あんちゃんがチャリンコ飛ばしよつちやん」

「おん」

「ほいで俺どこさ行くんや聞いたわけよ」

「おん、そいで？」

「山頂のとこまでつて。まあそりやあ、そうやろうけどなあ。天気悪なるつちゆうに変やなあ思うやん」

「そやなあ」

「んで俺聞いてみたんよ、なあにがあんだあ  
つて」

「あんたも物好きやなあ」

女将がジョッキになみなみとビールを注いで  
運んできた。

「なあに言うたん、そのあんちゃん」

「それがなあ、野暮用、やと」

「なんやあそれえ」

頬つぺを赤くした呑ん兵衛の笑い声が店内に  
響き渡る。

「あ、私聞いたことあるで。乃口山のくらげ  
伝説」

女将が話に割って入ってきた。たちまち呑ん  
兵衛たちは食いつく。

「なんやあそれえ」

「知らんけえ？うちのおつかさんが言うとおつ  
たんがな——」

今日は寄り道せず家に帰った。頭の中はや



はり煮え切らない、それが現実だというのだから尚更だ。僕は借りてきた二冊を小ちやぶ台に置いた。凶鑑と、「民俗学」のところにあったそれは単純な好奇心。カウンター前の棚に見つけたその本は、何となく神妙な雰囲気をしていた。題名は、郷土の神話。この地域の語り草がオムニバス形式にまとめられている。目次を開くと、十数のタイトルが列挙する中、乃口という名が目に入った。

「十七・乃口山のくらげ」

要約すると、風が山に向かって強く吹く日、白濁色の海月が町の近くに漂流してくるらしい。山頂からそのくらげを見つけると、陽光を浴びたくらげは色々に発光し幻を魅せる。時期は夏、時間帯は昼過ぎから暮れどきのこと。

僕は元来超常現象系は不信であったから他の話に関心は更々湧かなかったが、これには手が止まった。今日は怒涛の連続である、また一つピースがはまった。と、不意に小さな

紙切れが床に落ちた。僕はすかさず拾う。広げると算用数字で「十三」のみ書かれている。「十三？」

試しにその番目の話を見てみる、タイトルは「風の精霊」。場所・時期・時間帯全て不定。記されているのは、その精霊と出会った人は消息を断つ者が多いとだけ。

「嘘くさ」  
僕は自分の現実味を帯びてきた体験とのギャップに、安堵させるのである。

「明日行ってみるか」  
紙切れを十七話目の葉として、僕は静かに本を閉じた。

しかし以降、彼女が僕の前に現れることはなかった。時間を経るうちに僕が頂丘を訪れる回数は減った。

そうしてあの日からはや一年振りの夏が、今日到来するところまでになる。僕が今そこを目指すのは、もう一度、そんな淡い期待と

不安がふと起こったからである。

それは今朝の夢だった。暗闇の中、初めは体内を巡る血液の循環の音だけが聞こえていた。律動の穏やかな心地よさに、僕は思考をしないでいた。その時だった。

「——いで」

細い小さな声。僕の真後ろに微かに捉えた。

「また——くる」

その声には聞き覚えがあった。

「留叶」

僕は正常に働いてない意識をできるだけ向ける。

「だめ——ちや」

そこらじゅうから彼女は語りかけてくる。

あの時もそうだった。

「また——今日——」

「またって、留叶、君は——」

僕は言いかけて押しとどめた。

「今日の夕方、また会いに行く。約束」

声が震える。でも、その両拳には強く握りしめた跡があった。

突然に向かい風が吹き出した。奇妙にもそれは坂を上る僕を押し返す。陽は遠く水平線に沈もうとしている。汗ばむ額をからりとした空気が纏う。風を切って進む僕の前には、目的地の輪郭がぼんやりと映ってきた。頂上の丘陵に僕は胸が詰まった。

ついにラスト一漕ぎ、力強く踏み込むと、それまでの勾配は一気に緩やかになった。僕の前には――。

「久しぶり」

彼女がいた。僕を見て泣いている。

「なんで」

きつと分かっていた。僕は言葉が痞<sup>つか</sup>える。

「約束だから」

「――ごめん」

彼女の周りが強く揺れる。

「あなたも、苦しませることになっちゃう」

涙が脆く落ちた。

「留叶」

僕は小さく首を振る。

「連れてってよ」

「何、言ってるの」

「君は風の精霊だ」

「なんで、いつから」

言葉に戸惑いが混じっている。

「今確信した」

「怖く、ないの」

「怖いよ。でも」

僕は怖かった、日常が破綻していくのが。

でも、嬉しかった。

「もう独りじゃないから」

僕はペダルに足をかける。見据えるのは目の前の一本坂。

「待って」

「あなた、名前は」

「まだ言っていなかったっけ」

「夏彦なつひこ」

「夏彦、そっか、待ってる」

「約束」

彼女は声を残して姿を消した。風が止んだ。

僕は漕ぎを始める。左右の海には海月が揺らいでいる。或るところは鈍色、或るところは玉虫色、或るところは――。

斜陽が暮れ染まる僕を照らし、海が光る。

「青」と「橙」が混ざり合っている。

追い風が、僕の頬を掠める。

僕は自転車ごと、崖を飛んだ。

「風よ、薫れ」